

説教 『一粒の麦になる』山本 護 牧師

聖書 出エジプト記 4:10~12/ヨハネによる福音書 12:23~26

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、惟一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし(ヨハネ 12:24)」。新しい年を迎えるにあたり、この御言葉がぼんやり響いていた。高踏的でどことなく倫理的な文語の御言葉がなぜ浮かぶのか。A.ジイドの小説『一粒の麦もし死なずば(堀口大學訳)』でくり返し語られた韻律が耳に残っているせいだろう。文語の調子は、話し言葉よりも暗記しやすく、発語しやすい。

「一粒の麦」とはいったい誰のことか。大正という青春の空気か、古い文語で発語してみると何やら志めたものを感じる。新しい現代の訳では熱情が抑えられ、かえって老成した感じがする。ただ、御言葉が燃えていようと、落ち着いていようと、私たちが「一粒の麦」とされるために、イエスの「一粒の麦」があったことを捨象してはならない。「一粒の麦」とは第一に、イエス御自身の十字架と復活の出来事である(12:23)。第二に、「わたしに仕えようとする者は、わたしに従え(12:26)」と戒められることである。「一粒の麦」は十字架の出来事に限らない。それはまた「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る(12:25)」真実。永遠の命、つまり復活は、キリストだけのものではなく、「一粒の麦」たる者に与えられる真実なのである。

「あなたがたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではないか。あなたがたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒である(1コリント 15:36~37)」。私たちはただの種粒だが、「土からできたその人(アダム)の似姿となっているように、天に属するその人(キリスト)の似姿にもなる(15:49)」。すなわち「蒔かれる時には朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれる時には卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれる時には弱いものでも、力強いものに復活する(15:42~43)」。なぜ、そうなるのか。神御自身がキリストにおいて、朽ちる土を、私たちの卑しさを、弱さを、罪をまるごと引き受けて下さるからだ。そうして私たちは、天に属する人の似姿になる(15:49)。

「一粒の麦になるなどおこがましい、自分はとてもそんな器ではありません」と言うだろうか。神はジロリと睨み、「お前をつくったのは農じゃぞ、お前はそれを貶めるのか」と答えるだろう。モーセでさえそうであった(出エジプト 4:10)。腰が引けたモーセに神は告げる。「一体、誰が人間に口を与えたのか。一体、誰が口を利けないようにし、耳を聞こえないようにし、目を見えるようにし、また見えないようにするのか。主なるわたしではないか(4:11)」。「一粒の麦」であることは、他者との比較で測ることではない。足りない所も欠けた所も、人間の拙速な判断に過ぎず、神の目には意味あること。

「人の子が栄光を受ける時が来た(ヨハネ 12:23)」とつぶやいて、イエスは十字架の死へ向かった。そして「一粒の麦」は死に、多くの実を結んだ(12:24)。結ばれた多くの実はキリストに従い(12:26)、従った種はこの地にも蒔かれ、小さな実を結んでいる。2016年、私たちが種として蒔かれるべき荒野が広がっている。荒野を恐れるな、発芽の遅さを恐れるな、冬の寒さと夜の長さを恐れるな。「さあ、行くがよい。このわたしがあなたの口と共にあって、あなたが語るべきことを教えよう(出エジプト 4:12)」。



【おまけのひとこと】

農夫は蒔種前に土作りをする 何の品種か 天候の具合は いつ収穫するかを考慮して 私たちは未知なる種で 土作りができない だがぼんやり予感している 沃野ならいいが 荒野でも育つと